彙　　報

会長　早田輝洋

平成12年度第2回常任委員会

日　時：平成12年10月7日（土）午後2時～5時

場　所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室

出席者：早田輝洋（会長），梶　茂樹（事務局長），大石正幸，坂本　勉，坂本比奈子，清水克正，庄垣内正弘，早津恵美子

オブザーバー：田窪行則（編集委員長），吉田和彦（大会運営委員長），塩原朝子（事務局長補佐）

［報告事項］

（1）日本学術会議から第18期東洋学研究連絡委員の推薦要請があり，梅田博之氏を推薦した．

（2）危機言語シンポジウムについて，危機言語小委員会委員長の坂本比奈子氏から，以下の報告があった．10月21日に，「消滅の危機に瀕した言語と言語学者の役割」と題するシンポジウムを，東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門と共催で行う．言語学会は予算の一部を負担すると同時に，発表者の提供，および広報活動を行う．

（3）9月5日に御逝去になった評議員三根谷徹氏の追悼文を『言語研究』に掲載する．

［審議事項］

（1）第121回大会（名古屋学院大学，11月25日，26日）について，大会運営委員長の吉田和彦氏から以下の報告があった．

1. 第121回大会のプログラムを決定した．応募総数52件中，採択数35件であった．なお，今回から広報活動の一環としてプログラムの他にポスターを作成し，関係者に掲示を依頼することにした．印刷費は大会運営費から出費することとした．
2. 大会初日の出席者を増やすため，試行的措置として，シンポジウムのみを行っていた大会初日に，研究発表の一部を割り当てた．また，

従来，初日にのみ行われていたシンポジウムを，両日とも行うこととした．

3. 大会実行委員長の清水克正氏から，大会開催に当たり，大幸財団（名古屋市）から，17万円の補助金を受けることになった旨報告があった．この補助金は，開催校が提供するバス代などの支払いに充てることが了承された．

（2） 来年度以降の大会予定について

第122回大会（平成13年度春季大会）を，一橋大学（中島由美実行委員長）において6月23日，24日に行うことが了承された．なお，第123回大会（平成13年度秋期大会）は，九州大学（11月17日，18日）が候補にあがっている．

（3） 『言語研究』について，田窪行則編集委員長による以下の提案を検討した．

1. 欧文による良質の論文を掲載するため，投稿規定を変更し，現行の枚数制限を緩和する．
2. 彙報を『言語研究』から切り離し，ニューズレター化する．
3. 会則第19条を変更し，学会外から（特に在外外国人の）編集顧問を迎える．
4. 将来的に会員以外の投稿を認めることを検討する．
5. 『言語研究』の引用率および知名度を上げるため，英文の特別号を刊行する．

（4） 会費の銀行自動引き落としを三井ファイナンスサービスに依託することが了承された．

（5） 学会ホームページについて，今後の運営方法について議論が行われた．

（6） 愛知県立大学の岩田　礼氏から後援依頼のあった中国語学国際学会（2002年開催）について審議が行われた．

（7） 言語学会事務局長経費として月額3万円，事務局長補佐に対して謝金月額1万円を出費する件が審議された．

平成12年度第2回委員会

日　時：平成12年11月25日（土）午前10時～午後12時半

場　所：名古屋学院大学第一研究館第一会議室

出席者：早田輝洋（会長），梶　茂樹（事務局長），梅田博之，影山太郎，金水敏，久保智之，郡司隆男，坂原　茂，坂本　勉，坂本比奈子，清水克正，庄垣内正弘，白井賢一郎，田窪行則，田村すず子，辻　星児，長嶋善朗，西光義弘，原田かづ子，日比谷潤子，松村一登，松本克巳，

吉田豊，吉田和彦（以上24名）

委任状：40名

オブザーバー：窪薗晴夫（会計監査委員），荻野綱男（会計監査委員），塩原朝子（事務局長補佐）

［報告事項］

議事に先立って，大会開催校を代表して大会運営委員長の清水克正氏から挨拶があった．

（1）日本学術会議第18期東洋学研究連絡委員

上記の推薦要請に対して，梅田博之氏を推薦し，認められた旨報告があった．

（2）平成12年度第2回常任委員会（10月7日）の報告

会長より，上記委員会で以下の件について審議を行った旨報告があった．(i) 第122回言語学会の開催校（審議事項（1）参照），(ii) 日本言語学会（危機言語小委員会担当）と東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門共催のシンポジウム（報告事項(3)(C) および審議事項（8）参照），(iii)『言語研究』編集委員に関する学会規定変更（審議事項（2）参照），(iv) 学会ホームページ運営（報告事項（3)(F) 参照），(v) 学会会費口座自動振替（審議事項（5）参照），(vi) 中国語学国際学会の後援（審議事項（7）参照）

（3）各委員会，作業部会からの報告

(A) 大会運営委員会（吉田和彦委員長）

・第2回委員会を9月9日に学会事務局で開催し，第121回大会（平成12年度秋期大会）のプログラムを決定した．研究発表は，覆面審査に基づき，応募総数52件から，35件を採択した．今回は，試行的措置として，シンポウジウムを2つ企画し，それに合わせて研究発表を両日ともに行うことにした．これは，両日にわたる大会の出席者を増やすためである．また，今回から広報活動の一環として従来のプログラムの他にポスターを作成し，関係者に掲示を依頼することにした．

(B) 編集委員会（田窪行則委員長）

・『言語研究』第118号，第119号の刊行に向け，編集作業が進行中である．前回の委員会で報告した欧文誌刊行の計画は，執筆者の選定が難航している．

・欧文の執筆を増やすため，新規に外国人3人（うち在外外国人1人）を編集委員として迎えた．また，斉藤　衛氏（南山大学）を編集委員に迎えた．

・英文の執筆要項の暫定版を作成した．（審議事項の（2)(i）に関連）

(C) 危機言語小委員会（坂本比奈子委員長）

・空席となっていた3名の委員に稗田　乃氏（大阪外国語大学），奥田統己氏（札幌学院大学），笹間史子氏（大阪学院大学）が推薦され，委員会で承認された．また，池田　巧氏が委員長補佐を，林　徹氏が幹事を務めることになった．

・10月21日，東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門と共催で，東京大学（本郷キャンパス）を会場に「消滅の危機に瀕した言語と言語学者の役割」と題するシンポジウムを行い，65名の出席を得た．当学会は危機言語小委員会委員長の坂本比奈子氏を中心に発表者の提供，広報活動を行い，また予算の一部を負担した．（審議事項（8）参照）

・来年度は，特定領域研究（文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究（A)」環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究）とシンポジウムを共催する方向で検討中である．（審議事項（8）参照）

(D) 夏期講座小委員会（西光義弘委員長）

・2001年4月から2年間，荻野綱男氏が委員長をつとめることが決定した（任期2年，現委員長の西光氏は引き続き委員にとどまる）．梶委員は多忙のため退任し，後任に風間伸次郎氏（東京外国語大学）が当ることになった．また，今回の夏期講座について，実行委員長荻野綱男氏より以下の報告があった．

・8月21日～26日の6日間，大学セミナーハウス（東京都八王子市）で，第2回夏期講座を実施した．

・期間中，217名の受講生があった．13名の講師，3名の実行委員，約10名のアルバイトを加えると，合計250余名の参加者であった．

・受講料を中心とする収入（合計864万4560円）に対して，施設使用料，講師謝金などの支出（合計944万4814円）があり，約80万円の赤字が出た．その理由として，前回より講師の謝金を増額したこと，懇親会を無料としたこと，遠方からの学生に対して参加費の割引を行ったことが挙げられる．収支の詳細は平成12年度の決算報告（『言語研究』第120号掲載予定）を参照されたい．

・参加者と学会会員を対象にしたアンケートの結果も報告された．回答を見る限りでは，受講者は，大学院生が中心で，非会員の参加が多かった．宿泊施設に不満が多かった反面，日程やコマ数など講座の内容に関しては肯定的な意見が多かった．

・2002年に第3回の夏期講座を関西地区で開催する方向で検討中である

（審議事項の（4)参照）．今回の赤字をふまえ，懇親会は有料にする予定であるが，遠方者割引は継続する方針である．

(E) Pacific Rim Institute 検討小委員会（原口かづ子委員長）

2001年6月～7月にアメリカ合衆国サンタ・バーバラで開催される Pacific Rim Linguistics Institute に関して，奨学生募集のパンフレットを言語学会大会，夏期講習で配付した．また，ホームページからも申請用紙を取得できるようにした．奨学生の決定は3月中に行う．また，学会が派遣する講師の滞在費と旅費を負担することが再確認された．

(F) ホームページ作業部会（松村一登氏）

・ホームページを公開し，学会プログラムや『言語研究』の目次などを掲載した．今後，各委員会の活動など，ホームページに載せる情報を募集中である．

・運営が軌道に乗り次第，サーバーを東京大学から学会事務局（中西印刷）に移す予定である．その際，ホームページを管理するスタッフの確保をどうするかが問題となる．

・将来的には，ホームページ作業部会を小委員会に昇格させ，委員を増やす方向で検討する．

(G) 学会事務局（梶　茂樹事務局長）

評議員三根谷　徹氏逝去(平成12年9月5日)に当たり，会員の大島正二氏に追悼文を依頼した旨報告があった.『言語研究』118号に掲載する．

［審議事項］

（1） 第122回大会について

平成13年6月23日（土），24日（日）の2日間，一橋大学を会場に開催することが提案され，これを了承した（実行委員長は同大学社会学部の中島由美氏）．

（2） 『言語研究』に関する会則の変更について

田窪行則編集委員長から次の2点について提案があり，審議ののち承認された．

(i) 編集委員会で英文執筆要項を作成した．これを暫定的に学会ホームページ（http://www.tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp/~lsj/）で公開し，意見を集めた上で，来年本格的に運用を開始する．

(ii) 執筆要項中の一部が現状に合わなくなっているため，以下の点を変更する．（別記1参照）

・論文の枚数制限を，邦文論文80枚（現行50枚），欧文論文50枚（現行30枚）に変更する．

・応募の際，投稿者に連絡先としてファクス番号，e-mail アドレスの付

記を要求する.

・審査における匿名性を守るため，論文中に筆者が特定されるような表現をできるだけ用いないことを要求する.

また，同委員長からさらに次の提案があった．日本における言語学研究を海外に発信し，海外における言語研究との交流を深めるため，海外在住の研究者（非会員を含む）に編集委員になってもらう．主な目的は次のとおり.

1)『言語研究』を広く知ってもらうための広報活動を支援してもらう.

2) 1) により，海外からの投稿を増やす.

3) 査読者の選定など編集に関するアドバイスを受ける.

現行の規定では編集委員が会員に限られるため，増員が難しい状況となっている．非会員が「編集顧問」として編集に関与できるようにするために，会則第19条第3項を以下のように変更する.

（現　行）編集委員長は，編集委員若干名を個人会員中より指名委嘱し，編集委員会を組織する.

（変更案）編集委員長は，編集委員若干名を個人会員または非会員より指名委嘱し，編集委員会を組織する.

この案に関して，「編集顧問」の編集委員会の中での位置付け，非会員が編集に関与することの是非などについて議論が行われたが，結論が出ず，次回以降継続して審議を行うことになった.

（3） 彙報のニューズレター化

現在，『言語研究』に掲載されている彙報および大会発表要旨を『言語研究』から切り離し，ニューズレターの形で会員に配付するという案が事務局長から出された．この案に対して，経費および手間がかかることを懸念する意見が出され，今後，常任委員会で体裁等の試案作成および，経費の試算を行うことになった.

（4） 夏期講座について

西光義弘夏期講座小委員会委員長より，第3回の夏期講座を2002年に関西地区で開催する案が提案され，承認された．実行委員長は三原健一氏（大阪外国語大学）を予定している.

（5） 学会会費の自動振り替えについて

事務局長より，懸案となっていた学会費の銀行自動振替を三井ファイナンスサービスに依託する案が提案され，承認された．希望者に関しては，来年度の会費から振替を行う予定である.

（6） 事務局費と事務局長補佐費について

事務局長より事務局長経費として月額3万円，事務局長補佐に対して謝金月額1万円を出費する案が提案され，承認された．

（7）中国語学国際学会について

会員の岩田　礼氏（愛知県立大学）からの依頼を受け，2002年に同大学で開催予定の中国語学国際学会（国際中国語言学学会，International Association of Chinese Linguistics)を，学会で後援することが承認された．

（8）危機言語小委員会

日本言語学会と東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門との共催による10月21日のシンポジウム（報告事項（3)(C）参照）の開催に関して，事後承認が行われた．また，来年度の活動に関して，来年6月に予定されている特定領域研究（文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究（A)」環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究）とシンポジウムを共催するという案が坂本比奈子小委員会委員長から提出され，承認された．

（9）雑誌 Language Revitalization and Documentation（仮題）の提供について

出版社 Mouton de Gruyter（ドイツ）から，上記の雑誌が創刊されることになり，創刊後5年間，これを本学会会員に無償提供するとの申し出があった．これに対し，学会としてこの申し出を受けることが承認された．学会事務局への一括送付を依頼し，大会などで配付する予定である．同社によれば，この雑誌は，「危機言語」をテーマとし，Volkswagen Stiftung の助成によって発行されるものである．

【別記1】 執筆要項の改訂

	(旧)	(新)
2. 枚数ならびに用紙：	図・表等を含め，邦文論文は400字詰め横書き原稿用紙50枚分以内，欧文論文はタイプダブルスペースで30枚分以内；フォーラム欄用原稿は……	図・表等を含め，邦文論文は400字詰め横書き原稿用紙80枚分以内，欧文論文はタイプダブルスペースで50枚分以内；フォーラム欄用原稿は……
8. 提出部数ならびに様式：	1. 表紙：論文名，執筆者名（ふりがな），所属機関（無い場合は無しと明記），連絡先（郵便番号，電話番号共）．	1. 表紙：論文名，執筆者名（ふりがな），所属機関（無い場合は無しと明記），連絡先（郵便番号，電話番号，ファックス番号，e-mail アドレス，共）．

2. 論文本文：第一頁目の初めに論文名を書き（執筆者名，所属機関名は書かない），キーワード，そして本文と続ける．	2. 論文本文：第一頁目の初めに論文名を書き（執筆者名，所属機関名は書かない），キーワード,そして本文と続ける．査読は匿名で行われるので，本文中においても著者が特定できるような表現はできるだけ避ける．

平成12年度第1回危機言語小委員会

日　時：平成12年6月16日（金）午後1時半より4時

場　所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室

出席者：早田輝洋（会長），池田　巧，梅田博之，梶　茂樹，田村すず子，角田太作，津曲敏郎，奈良　毅，峰岸真琴，林　徹，宮岡伯人，村崎恭子

［審議事項］

1. 委員の確定

今年度から3年間の委員候補を委員とした．確定した委員は以下のとおり．池上二良，池田　巧，梅田博之，梶　茂樹，坂本比奈子，崎山　理，田村すず子，土田　滋，角田太作，津曲敏郎，中川　裕（千葉大学），奈良毅，峰岸真琴，林　徹，福井　玲，宮岡伯人，村崎恭子（以上17名．当初委員候補となっていた八杉佳穂氏は辞退）

2. 委員長の選出

出席者による投票の結果，坂本比奈子氏を委員長に選出した．

3. 委員の追加

小委員会の定員が20名であるため，本日確定した委員に加え，あと3名の委員を追加委嘱することとした．奥田統己，笹間史子，稗田　乃の3氏に当小委員会に委員として加わっていただくことを要請することが承認された．なお，笹間，稗田両氏に加わっていただいてもなお，関西以西の地域からの委員が少ないとの指摘があり，3年後の委員の交替に際しては地域のバランスをとるべきとの意見が出された．

4. 当小委員会と特定領域研究との関係について

特定領域研究「環太平洋の言語」の研究代表者である宮岡委員より，特定領域研究のシンポジウム（11/24，25）と秋の学会大会（11/25，26）との日程が一部重なってしまったことに関連して発言があった．今後の活動においては，今後このようなことがないように連絡を密にする旨の確認がな

された.

5. 小委員会会議費について

毎年度，会議費として支給される15万円の使い方について，弁当代として使う，交通費として支給する，あるいは小委員会に出席するため宿泊せざるを得ない委員に宿泊費のみ（1万円）を支給する，などの意見が出されたが，継続審議とする事とした．なお，方針が決まり次第，今回の小委員会の分はさかのぼって支給することとした.

6. 今年度の活動方針

今年度の活動方針についてさまざまな意見が出された．一般向けの啓蒙的な講演会やシンポジウムなどについては，その意義は十分認められるものの，具体的成果がややはっきりしないこと，広報に非常な労力が必要なことなどを考慮し，今年度は行わないこととした．その代わり，特定領域研究，学会の夏期講習，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の言語研修などとのタイアップ企画の可能性を考えてみることとした.

7. 小委員会メーリング・リストの立ち上げ

最後に峰岸委員から，小委員会のメーリング・リストを作ってはどうかとの提案がなされ，角田委員から同委員の所属する東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門で引き受けられるとの発言があり，同部門に依頼することとした.

平成12年度第2回危機言語小委員会

日　時：平成12年11月23日（木）午後1時半より4時

場　所：京都国際会館

出席者：池田　巧，奥田統巳，梶　茂樹，坂本比奈子，崎山　理，笹間史子，田村すず子，角田太作，津曲敏郎，奈良　毅，峰岸真琴，宮岡伯人，村崎恭子

［審議事項］

1. 新委員の承認

前回の委員会で推薦のあった笹間史子氏，奥田統巳氏，稗田　乃氏の3委員が新たに委員として承認された.

2. 予算の使途について

小委員会の会議費15万円から，毎回，委員会出席者にたいし，交通費として近距離は3000円，遠距離は5000円支給することが決まった.

3. 来年度の活動について

2001年6月9日，10日に東京で，特定領域研究「環太平洋の言語」と共

催で，シンポジウムを開催することが決まった．

4. メーリング・リストについて

前回委員会で提案されたメーリング・リスト立ち上げの確認がなされ，了承されたので，改めて東京大学の福井委員に立ち上げと，管理者になって頂くことを依嘱した．また，メーリング・リストは，主として意見交換に利用し，メールを利用していない委員にはファックス等で連絡する．緊急を要する場合はメール会議で審議を行ってもよいが，結果は文書で全委員に通知する旨が確認された．

5. ムートンからの連絡について

角田委員よりムートンから日本言語学会宛にメールで問い合わせが来ているとの紹介があり，内容について検討して欲しいとのことで資料が配付された．主旨は，Mouton が Language Revitalization and Documentation という雑誌を刊行する予定があり，最初の5年間は日本言語学会の会員に無料で送付したいのだが，その方法について提示する3案から適当な方法を選択し，希望部数を年末までに知らせてほしい，というものであった．検討のうえ言語学会の委員会にはかることとなった．

6. 次回の委員会の日程について

次回の危機言語小委員会は6月23日（土），24日（日）の言語学会大会（於一橋大学）の前に開催する予定で，具体的な日程は調整ののち再通知することになった．

［報告事項］

1. 東京大学とのシンポジウム共催の件

福井委員より，平成12年10月21日，日本言語学会と東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門との共催でシンポジウムを開催したことが報告された．この企画は，前回の小委員会および委員会の後に出てきた話であったため，小委員会についてはメール会議で全員の賛成を得，委員会については会長の承認を得て，第2回委員会で事後承諾を得ることで話を進めたこと，シンポジウムのプログラムは，言語学会秋季大会のプログラムに同封して言語学会の全会員に郵送された旨の報告が委員長からなされた．今回のシンポジウムの内容を報告書にまとめる計画の有無について質問が出され，福井委員からは検討したいとの回答があった．

2. 小委員会規定にもとづいて，委員長から，幹事に林　徹委員，委員長補佐に池田　巧委員が任命された旨報告がなされた．

第121回大会

期　日　2000年11月25日（土）～26日（日）
会　場　名古屋学院大学

第1日（11月25日）

開会の辞　会長
開催校挨拶　木村光伸

公開シンポジウム　午後1時10分～4時00分
量化―意味論は行き詰まっているか
司　会　今仁生美
基調報告者　郡司隆男
西垣内泰介
金沢　誠
一般討論
総　括

研究発表　午後4時20分～5時50分

◦A 会場
司会　高見　健一
(A 1)　4：20～　日本語の数量詞遊離と助詞省略について　加藤鉱三
(A 2)　4：50～　文の階層構造と従属節の機能レベル　丸山岳彦
(A 3)　5：20～　疑似二重主格構文とその関係節化について　山田圭吾

◦B 会場
司会　河崎　靖
(B 1)　4：20～　西フリジア語の名詞抱合の特徴と抱合動詞の形成　清水　誠
(B 2)　4：50～　Conative Construction ―英語とスウェーデン語の比較―　今里典子　當野能之
(B 3)　5：20～　倒置構文と近接性　三浦香織

◦C 会場
司会　定延　利之
(C 1)　4：20～　TWIST とその関連語の意味分析　宮畑一範
(C 2)　4：50～　〈容器のスキーマ〉と形容詞の語彙ネットワーク　仲本康一郎
(C 3)　5：20～　否定性を含む肯定文の諸相 ―空間認知に根ざす否定性に向けて　有光奈美

◦D 会 場

司会 金水 敏

(D 1) 4：20～ 現代日本語のア系列指示代名詞による指示について 三好準之助

(D 2) 4：50～ 動的ラレル文（受身）と静的ラレル文（自発・可能・尊敬） 荒 籾 善 成

(D 3) 5：20～ 「私に言われても困る」—受動文に関する一考察 大 野 純 子

◦E 会 場

司会 町田 健

(E 1) 4：20～ ディスコース管理における談話標識—インタビューと雑談の比較 林 淑 璋

(E 2) 4：50～ 読点の多寡に関する文章間の差異について 岩 畑 貴 弘

(E 3) 5：20～ 形態分析プログラムによるコーパスへの形態情報の付加について 松 村 一 登

会員懇親会 午後6時～8時

第2日（11月26日）

研究発表 午前9時40分～12時00分

◦A 会 場

司会 高野 祐二

(A 4) 9：40～ Syntax of Cleftability of Adverbials 水 口 学

(A 5) 10：10～ Agreement Patterns and Non-universal Application of the Extended Projection Principle in A-movement 那 須 紀 夫

司会 酒井 弘

(A 6) 11：00～ Scrambling as "Agreeless Move" in Japanese 出嶋真由美

(A 7) 11：30～ Locality Conditions on Scrambling and QR 本 田 謙 介

◦B 会 場

司会 村杉 恵子

(B 4) 9：40～ 韓国の帰国子女の言語生活 郭 銀 心

(B 5) 10：10～ American Sign Language と子供の言語に見られる wh 脱落現象について 山 腰 京 子

司会　辻　星児

(B 6)　11：00～　『捷解新語』における基本形「スル」の不完成相の用法について　金　光珠
—『大蔵虎明本』との比較を通して—

(B 7)　11：30～　副詞の移動性に関する日韓対照研究　李　鐘姫
—17世紀朝鮮資料『捷解新語』を資料として—

◦C 会場

司会　栗林　裕

(C 4)　9：40～　キルギス語の語頭子音 κ について　大崎紀子

(C 5)　10：10～　インドネシア語における前置詞 pada/di［に，で］の用法と意味　湯浅章子
—空間認識に関する日-イ対照—

司会　山根　典子

(C 6)　11：10～　Implicational Featural Relations in a Constraint-based Approach　杉本貴代

(C 7)　11：30～　標準アラビア語の弱動詞にみられるわたり音／母音交替について　桑本裕二

◦D 会場

司会　有田　節子

(D 4)　9：40～　時を表すスペース導入表現の意味表示について　酒井智宏

(D 5)　10：10～　条件文と過去における習慣文との関連について　加藤千尋

司会　阿部　泰明

(D 6)　11：00～　中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系について　安　平鎬　福嶋健伸
—存在型アスペクト形式の文法化—

(D 7)　11：30～　「てあげる」構文への一考察　山橋幸子

◦E 会場

司会　油谷　幸利

(E 4)　9：40～　完了した動作を表す韓国語 hako issta 形　若生正和

(E 5)　10：10～　中国語のパーフェクトに関する一考察　劉　綺紋
—“-過”と“-了”を中心に—

司会　江口　正

(E 6)　11：00～　複合動作「過ぎる」の意味解釈について　井本　亮

(E 7) 11：30～ 日英語における複合語の諸特徴について 小松千明
—動的視点から—

公開シンポジウム 午後1時～4時30分
日本語の系統：回顧と展望
司会 松本克己
オーストロネシア語族と日本語 崎山 理
アルタイ諸言語（朝鮮語も含む）と日本語 板橋義三
タミル語と日本語 大野 晋
コメンテイター 土田 滋
庄垣内正弘
児玉 望
一般討論

閉会の辞

◇ 退　　会

国内会員　7名

在外会員　1名

◇ 誤記の訂正

『言語研究』第118号に以下の誤記がありましたので，お詫びして訂正いたします．

	誤	正
表紙および81頁の論文名	Reconstructing the Proto-Japonic *kakari musubi, … ka … -(a)m-wo*	Reconstructing the Proto-Japonic *kakari musubi, …*ka … -(a)m-wo*

◇ 本誌は，平成12年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである．